

資料

他者の視線を喚起させるポスターの掲示による
社会的迷惑行為への影響橘美沙^{*1} 小野夏月^{*1} 橋詰佳代子^{*2} 坂口遥菜^{*3} 森影佳子^{*4} 中村有里^{*5}

要 約

本研究の目的は、他者の視線を喚起させるポスターの掲示が社会的迷惑行為に及ぼす影響を明らかにすることであった。本研究では川崎医療福祉大学での「大学建物内下足進入禁止」の規則違反を「社会的迷惑行為」とし、ポスター掲示による介入を行った。目の絵を描いたポスターを川崎医療福祉大学の所定位置に2週間設置し、外から大学建物内に下足のまま進入する学生が多く見られる観察場所を通過した学生、およびそれに占める下足を履いて大学建物内に進入した学生の人数を記録した。ポスター介入前後で下足割合を比較した結果、朝の観察時間では下足割合に変化がみられなかったが、昼の観察時間ではポスター介入後に下足割合が減少していた。本研究の結果から、他者の視線を喚起させるポスターは、社会的迷惑行為に影響を及ぼすことが示唆された。

1. 緒言

1.1 社会的迷惑行為とは

電車内の飲食やゴミのポイ捨て、道への座り込みや歩きスマホなど、直接的には被害がなくても、社会的な視点から見れば迷惑である行動は社会的迷惑行為と定義づけられている¹⁾。また、吉田²⁾は、社会的迷惑行為を「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果的に他者へ不快な感情を生起させる行為」と定義しており、本人が意図していなくても、他者に不快な感情を生起させてしまえば社会的迷惑行為になると示した。このような社会的迷惑行為をする人々は後を絶たない。

1.2 これまでの研究における社会的迷惑行為への対策

このような社会的迷惑行為への対処として油尾と吉田³⁾は、社会的迷惑行為をする人物に飲み物を振舞うといった好意の提供をすることで、迷惑行為者の社会的迷惑行為を抑制する動機づけが増加することを示した。また、小柳⁴⁾は歩行を検知すると警告画面が表示される歩きスマホ防止アプリによる介入

において、警告画面表示時間が7秒以上のとき、歩きスマホ防止に有効であることを示した。さらに、佐藤と佐藤⁵⁾は大学生の講義中の私語に対し、授業協力点を用いた私語禁止の呼びかけを実施し、私語の低減に一定の効果が見られた。これらの先行研究から、社会的迷惑行為に対し様々な対策が行われていることが分かる。しかし、これらは特定の対象者に直接作用する対策であり、長期を見据えた不特定多数への実用化は難しい。

社会的迷惑行為への対策の例として、ポスターによる介入がある。

友野⁶⁾は、人々が実際に行っていることに対する社会規範である「記述的規範」と「メッセージの送り手の情報の呈示」といった、一定の条件を満たせば社会的迷惑行為の抑止策として感謝メッセージを記載したポスターが効果的であると示した。

他者の監視を喚起させる抽象的な「目」のイラストが人間の向社会的行動を引き出す⁷⁾という知見に基づき、阿部と藤井⁸⁾が「目」のデザインを取り入れたポスターを用いて調査を行った結果、放置駐輪

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻

*2 株式会社テレポート

*3 株式会社ブプレひまわり

*4 株式会社良品計画

*5 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(連絡先) 橘美沙 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : misat0825@yahoo.co.jp

の抑制効果を示した。また、監視カメラと監視カメラを明示する看板の代わりに用いた目の絵を描いた看板が、ゴミのポイ捨てを抑制するという結果も得られている⁹⁾。このように、「目」の表示をすることにより他者の視線が喚起され、逸脱行動の抑制や協力行動の促進がもたらされると考えられる。他者の視線を喚起させるポスターは、社会的迷惑行為を行う者に対し効果的であるといえよう。

1.3 大学生の社会的迷惑行為

川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）では建物内の清潔感を保つため、上履きの使用が定められている。そのため学科ごとに指定の上履きをロッカーで履き替えることが定められ、下足で建物内に立ち入ることは禁止されている。川崎医療福祉大学学生生活委員会¹⁰⁾によると、下足禁止のルールを「いつも守っている」学生は全体の85.5%であり、「あまり守らない」「守っていない」学生は合計で約200人（6.2%）いる（p.18）。下足禁止について繰り返しアナウンスがなされ、注意喚起を促すポスターも掲示されているが、下足で建物内に立ち入る学生は後を絶たない。川崎医療福祉大学における建物内での下足行動は直接的に学生への迷惑にはならないものの、床を汚すという点では多くの学生や教職員の迷惑になる可能性があり、社会的な視点から社会的迷惑行為と考えられる。

1.4 本研究の目的

阿部と藤井⁸⁾や中俣と阿部⁹⁾より、行動変容を促すには他者の視線を喚起させる抽象的な「目」のイラストを描いたポスターが効果的であると考えられた。また、ポスターは同時に多くの場所での掲示が可能のため、大学建物内で実用化しやすいと考えられる。本研究では、他者の視線を喚起させるポスターが社会的迷惑行為に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。本研究の調査における社会的迷惑行為は、「川崎医療福祉大学において学生が下足で建物内に立ち入ること（以下、下足行動とする）」とした。

2. 方法

2.1 デザイン

ベースライン期（2016年7月12日（火）、13日（水）、19日（火）、20日（水））、介入期（2016年11月2日（水）、9日（水））からなるABデザインを用いた。

2.2 観察内容

観察時間帯に上りエスカレーターの降り口を通過した学生の総数とそのうち下足を履いている学生総数であった。

2.3 観察時間と観察場所

ベースライン期は2016年7月12日（火）、13日（水）、19日（火）、20日（水）のそれぞれ8:15から8:40（以下、朝の観察時間とする）、12:15から12:40（以下、昼の観察時間とする）の計8回の観察を行った。介入期は2016年11月2日（水）、11月9日（水）のそれぞれ8:15から8:50（以下、朝の観察時間とする）、12:15から12:50（以下、昼の観察時間とする）の計4回の観察を行った。ベースライン期が7月で介入期が11月で同じ月に観察を行っていない理由として、7月後半、8月、9月、10月は定期試験期間や夏休み、履修登録期間等があり、通常時の講義形態ではない講義があった。そのため、ベースライン期と介入期の環境を統一するために7月と11月という観察時期となった。

観察時間は、エスカレーターの利用率が高いと考えられる時間帯を選択した。朝の観察時間は午前中の講義開始前30分であるため、通学する学生が多く、エスカレーターの利用率が高いと考えた。昼の観察時間は午後の講義開始前30分であった。この時間帯は昼休みで学食等を利用した学生が講義室に向かうためエスカレーターの利用率が高いと考えた。

また、観察曜日は全学科対象の講義が多く開講されている日はエスカレーターの利用率が高いと考え、火曜日と水曜日を選択した。他にも全学科対象の講義が開講されている日はあったが、火曜日と水曜日を観察日に選択した理由として、講義棟での講義が多い1限（火曜日）と講義棟での講義が少ない1限（水曜日）、講義棟での講義が多い3限（水曜日）と講義棟での講義が少ない3限（火曜日）とで比較に適していると考えたためであった。またベースライン期と介入期の天気を統一するためにベースライン期の天気も観察した。ベースライン期に複数の日時に観察を行った理由として、大学建物内においてどの曜日、時間帯に下足行動が見られるかを明らかにすることが含まれている。

観察場所は上りエスカレーターの降り口であった（以下、観察場所とする）。上りエスカレーターの降り口を観察場所を選択した理由は、上りエスカレーター上り口付近には外から建物内に入れる自動ドアがあり、ロッカーで上履きに履き替えenいまま、2階エスカレーター付近の自動ドアを利用して外から建物内に入る学生が多く見られるため、下足行動を観察するにあたって最も適した場所であると考えたためであった。また、エスカレーター降り口で観察を行ったのはこのエスカレーターが講義室のある別棟（以下、講義棟）への渡り廊下に続いているため、講義棟に向かう学生はエスカレーターを利用す

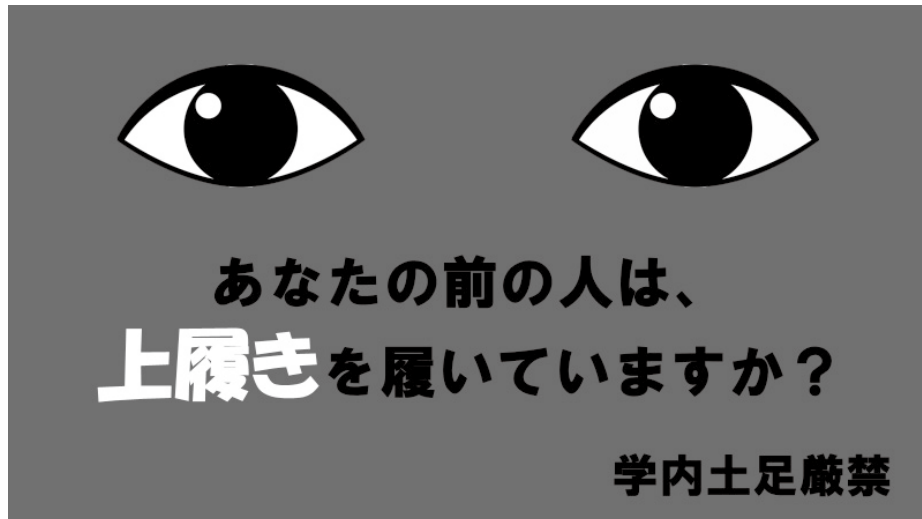


図1 使用したポスター

ると考えたためであった。

2.4 材料

ベースライン期の観察では、正の字で数える手書きと携帯電話のアプリを使用した。アプリはタンポポラボタッチカウンター(数取器アプリ)とハンディカウンターの2つであった。

介入期の観察では、プラス株式会社の数取器手掌用を観察者1名につき1つずつ使用した。介入期のポスターは阿部と藤井⁸⁾を参考に目のデザインを取り入れて作成した(図1)。また、「あなたの前の人は、上履きを履いていますか」と記載し、他者からの視線を喚起させる内容とした。

ポスターを確実に認識してもらい、下足行動への影響を明らかにするため、2016年10月26日(水)の8:30に2階エスカレーター上り口に1か所立て看板を設置した。そして、11月9日(水)の12:50まで設置した。その後デブリーフィングとして実験の目的と内容、研究代表者の連絡先を記載したポスターを1週間同じ場所に設置した。また、ポスターの掲示場所をエスカレーター上り口の1か所にした理由は、エスカレーターを利用する学生の目に留まりやすいだろうと考えたためであった。

2.5 手続き

観察にあたり、川崎医療福祉大学学生課にて観察のためのポスター掲示の許可を得た。観察者5名は、上りエスカレーターを降りた学生の足元が見える観察場所付近に設置してあるテーブルにつき全員同じ位置から観察を行った。5名の観察者は、2名が下足の学生数、3名が学生の総数を数えるというものであった。ベースライン期と介入期は同様の手続きで観察を行ったが、朝の観察時間の観察のみ、観察者1名が参加できなかったため、エスカレーターを通

過した学生の総数を2名、下足の学生数を2名の計4名で観察を行った。

また、上履きについては、指定の上履きがある学科は指定の上履き、指定のない学科は白を基調とした上履きであると定義した。下足については、白を基調とした靴であっても太い他色のラインが入っているものやアクセサリーがついたものは下足であると定義した。また、学科指定の上履きは事前に確認を行った。

3. 結果

3.1 ベースライン期の観察対象場面における下足割合

観察場所を通った学生の学生総数と下足数はそれぞれ、観察者が観察した値の平均値を算出した。表1にベースライン期における下足割合を示した。

3.2 介入期の観察対象場面における下足割合

表2に介入期における下足割合を示した。

3.3 ベースライン期とポスター介入期後の比較

ベースライン期とポスター介入期のポスター介入以外の条件を統一するために、天気が晴れである7月20日のデータを用いた。ポスター介入による下足行動の変化を検証するため、ベースライン期とポスター介入期の比較を行った。しかし、延長した10分間の学生総数と下足数を観察していなかったため、厳密には比較は困難であり、問題点の一つであるが、今回は考慮しないものとし、ベースライン期の8:15から8:40(1限開始前)と12:15から12:40(3限開始前)も、朝の観察時間と昼の観察時間として取り扱った。

学生総数をベースライン期と比較すると、ポスター介入期の観察時間3は11月2日に209名、11月9日

表1 ベースライン期における下足割合

| 日付 | 時間(天気) | 下足 | 上履き | 総数 | 下足割合 |
|----------|-------------|----|-----|-----|-------|
| 7月12日(火) | 朝の観察時間(くもり) | 59 | 282 | 341 | 17.3% |
| | 昼の観察時間(くもり) | 42 | 360 | 402 | 10.4% |
| 7月13日(水) | 朝の観察時間(雨) | 30 | 275 | 305 | 9.8% |
| | 昼の観察時間(くもり) | 62 | 236 | 298 | 20.8% |
| 7月19日(火) | 朝の観察時間(晴れ) | 54 | 262 | 316 | 17.1% |
| | 昼の観察時間(晴れ) | 46 | 248 | 294 | 15.6% |
| 7月20日(水) | 朝の観察時間(晴れ) | 52 | 285 | 337 | 15.4% |
| | 昼の観察時間(晴れ) | 84 | 218 | 302 | 27.8% |

表2 介入期における下足割合

| 日付 | 時間(天気) | 下足 | 上履き | 総数 | 下足割合 |
|----------|------------|----|-----|-----|-------|
| 11月2日(水) | 朝の観察時間(晴れ) | 81 | 465 | 546 | 14.8% |
| | 昼の観察時間(晴れ) | 49 | 227 | 276 | 17.8% |
| 11月9日(水) | 朝の観察時間(晴れ) | 92 | 539 | 631 | 14.6% |
| | 昼の観察時間(晴れ) | 53 | 195 | 248 | 21.4% |

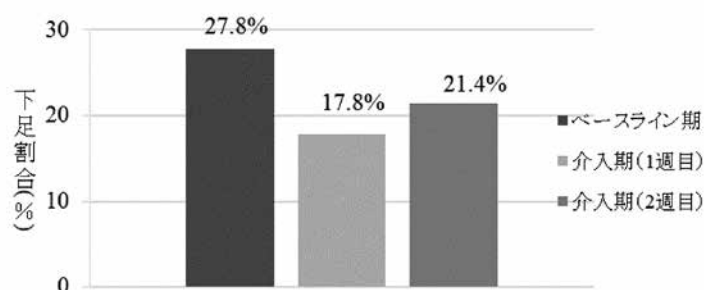


図2 昼の観察時間における下足割合の比較

注) 7月20日のみ観察時間は10分間短かった。

に294名増加し、昼の観察時間は11月2日に26名、11月9日に54名減少した。下足割合をベースライン期と比較すると、ポスター介入期の朝の観察時間は全て約15%で変化がなかったが、昼の観察時間は11月2日に10.0%、11月9日に6.4%の減少がみられた。図2に介入前後で変化がみられた昼の観察時間における下足割合の程度を示した。

また、下足割合に変化が見られた昼の観察時間において、 χ^2 検定を行った。7月20日と11月2日を比較した結果、1%水準で有意差が認められた($\chi^2=8.239$, $df=1$, $p<.01$)。また、7月20日と11月9日を比較した結果、10%

水準で有意傾向の差異が認められた($\chi^2=3.022$, $df=1$, $p<.10$)。

4. 考察

ベースライン期の結果より、水曜日の昼の観察時間はどの時間帯と比較しても下足割合が高いことが確認できた。これは水曜3限に全学科対象の講義が多く開講されていることから大学建物内の人数も多くなり、それに伴って下足の人数も多くなったためと考えられる。また、観察場所を通る学生の総数が多くなることで自分が下足であっても目立たないで

あろうといった考えが働いているとも考えられる。上述より、介入期では水曜日に観察を行うことにした。また観察時間に関しては、ベースライン期の観察時に講義開始前後の10分間に駆け込んでくる学生が見られたため、介入期では同じ時刻から観察を開始し、観察終了を10分間延長した。

本研究の目的は、他者の視線を喚起させるポスターを掲示することによって、社会的迷惑行為に及ぼす影響を明らかにすることであった。

11月2日、11月9日の朝の観察時間に観察された学生総数が増加した理由は、講義が始まる直前に駆け込む学生や遅刻した学生が10分間の延長時間帯に多くいたためであると考えられる。またベースライン期と介入期では、春学期と秋学期で時期が異なり、講義が変わっていたため、観察対象者の違いによって人数に影響があった可能性が考えられる。

ベースライン期と介入期（11月2日と11月9日）における昼の観察時間の下足割合に有意な差あるかを見るために χ^2 検定を行った結果、ベースライン期よりもポスター介入期の11月2日と11月9日の下足割合が減少したと解釈ができた。つまり、今回の実験で使用した他者の視線を喚起させるポスターは、下足行動に影響を及ぼしたということが示唆された。このポスターの効果を示した結果は、阿部と藤井⁸⁾や中俣と阿部⁹⁾の先行研究の結果とも一致している。

4.1 本研究の問題点・改善点

本研究の問題点としては以下の3点が考えられた。

1点目はベースライン期と介入期の時期が異なり、講義内容が変わっているということである。講義内容が変わっているということは、必然的に観察場所を通る学生も変化するという点であり、観察対象者の変化という根本的な問題となった。2点目はベースライン期と介入期の季節が異なり、環境の統制を考慮していなかったという点である。3点目は介入期の観察時間をベースライン期の観察時間よりも10分延長したが、その10分間の下足人数を観察していなかったことである。ベースライン期には、この10分間で下足行動をとる学生が多く見受けられており、この時間帯の変化を見ることが他者の視線を想起させるポスターの効果を検証するうえで必要だったのではないかと考えられる。

これらの問題点を踏まえ、環境と調査対象の条件が十分に統制された研究をすることが望ましいと考える。本研究に問題点は多く残っているが、社会的迷惑行為に他者の視線が影響を与えることを示す研究になったであろう。

加えて本研究の結果から、本研究の方法における改善点を2点挙げる。

1点目は、本研究で設置・使用したポスターの数である。本研究ではポスターは1か所にしか設置していなかった。しかし、ポスターを設置した場所を通った数人の学生から話を聞いたところ、ポスターを見ていなかった、ポスターに気づかなかったという返答があった。このことから、他者の視線を喚起させるポスターを複数個所に設置し、学生がポスターを認識する確率を上げることで、下足行動をとる学生の人数を減少させることができるのではないかと考えられる。また、ポスター前を通過した学生がポスターを認知していたかの調査を行うことで、ポスターの効果をより複合的に示すことができるだろう。

2点目は、一定数の社会的迷惑行為を減らすためには、他者の視線を喚起させるポスターとは異なる種類のポスターによる介入を行うことである。社会的迷惑行為を減少させることを目的とした本研究とは異なる種類のポスターの内容として、「感謝メッセージの呈示」が挙げられる。「感謝メッセージの呈示」とは、例えば公共のトイレなどの「いつもきれいに使用していただきありがとうございます」といった感謝を表したポスターのことである。油尾と吉田³⁾では、日本人の大学生を対象として好意提供の操作を行う際には、なるべく送手手の自発性が感じられる自然な方法が求められるとしており、具体的には「感謝メッセージの呈示」が望ましいとしていた。友野⁶⁾は、人々が実際に行っていることに対する社会規範である「記述的規範」と「メッセージの送手手の情報の呈示」といった一定の条件を満たせば社会的迷惑行為の抑止策として効果的であるとしていた。このことから、社会的迷惑行為の減少を目的とする研究を行う際には、好意の提供として「感謝メッセージの呈示」を利用するのがよいのではないかと考えられる。

4.2 今後の展望

本研究の目的は、他者の視線を喚起させるポスター掲示による社会的迷惑行為に及ぼす影響を明らかにすることであった。しかし、社会的迷惑行為の減少を目的とするならば、本研究の結果からも示唆されるように、本研究のような方法での他者の視線を喚起させるポスターの介入では十分ではないだろうと考える。

社会的迷惑行為の抑止という点でポスターの掲示は広く実用化のできる介入方法であると考えられる。本研究ではポスターの設置数は1か所のみであり、掲示していた期間は2週間であったが、社会的迷惑行為をする学生の人数は減少していた。このことから、他者の視線を喚起させるポスターの掲示は、社会的迷惑行為に影響を及ぼすことが示唆された。

社会的迷惑行為の抑止のためにポスターの掲示を行う 研究の結果が役に立つことを期待したい。
う際には、先に挙げた改善点を加えるなどにより本

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた久常孝佳さんに感謝致します。また、本研究を行うにあたりご協力頂きました川崎医療福祉大学学生課の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 吉田俊和, 安藤直樹, 元吉忠寛, 藤田達雄, 廣岡秀一, 斎藤和志, 森久美子, 石田靖彦, 北折充隆: 社会的迷惑に関する研究 (1). 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 53-73, 1999.
- 2) 吉田俊和, 斎藤和志, 北折充隆編: 社会的迷惑の心理学. ナカニシヤ出版, 京都, 2009.
- 3) 油尾聡子, 吉田俊和: 社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供. 実験社会心理学研究, 53(1), 1-11, 2013.
- 4) 小柳翔: 歩きスマホ防止アプリにおける防止効果と利用者の不満を考慮した設定値の検討. 高知工科大学附属情報図書館, 学位論文・卒業論文, 2014 (平成26) 年度: 情報学群, <http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/2014/13/201413.html>, 2015. (2018.6.4確認)
- 5) 佐藤美幸, 佐藤寛: 教室の講義における大学生の私語マネジメント—好子出現阻止による弱化を用いた介入の有効性—. 行動分析学研究, 28(2), 72-81, 2014.
- 6) 友野聡子: 社会的迷惑行為の抑止策としての感謝メッセージ. 宮城学院女子大学研究論文集, 119, 51-56, 2014.
- 7) Haley KJ and Fessler DMT: Nobody's watching?: Subtle cues affect generosity in an anonymous economic game. *Evolution and Human Behavior*, 26, 245-256, 2005.
- 8) 阿部正太郎, 藤井聡: 他者の監視を喚起させる「目」の絵を用いたポスターによる放置駐輪抑制効果の検証. 都市計画論文集, 50(1), 37-45, 2015.
- 9) 中俣友子, 阿部恒之: ゴミのポイ捨てに対する監視カメラ・先行ゴミ・景観・看板の効果. 心理学研究, 87(3), 219-228, 2016.
- 10) 川崎医療福祉大学学生生活委員会: 平成27年度学生生活実態調査報告書. 川崎医療福祉大学, 岡山, 2016.

(平成30年8月28日受理)

Influence on Social Nuisances by Posting a Poster Evoking the Gaze of Others

Misa TACHIBANA, Natsuki ONO, Kayoko HASHIDUME, Haruna SAKAGUCHI,
Kako MORIKAGE and Yuri NAKAMURA

(Accepted Aug. 28, 2018)

Key words : social annoyance, college student, poster, one's eyes

Abstract

The purpose of this study was to explain how a poster which evokes the gaze of others influences social nuisances. This study intervened by posting a poster for a social nuisance of the rule violation for the “Street foot ware ban in Univ. buildings” in Kawasaki University of Medical Welfare. The setting of the poster on which the picture of eyes was drawn was for two weeks in a predetermined position of the university. The observation place was the place where the students who entered the university from the outside were seen a lot. The observation recorded the number of students who passed through in the observation place and the number of the students who wore street shoes among them. As a result of comparing the difference of “street foot ware” rate before and after the poster intervention, there was no change in percentage of “street foot ware” in the observation time in the morning. However, the percentage of “street foot ware” decreased after the poster intervention in the afternoon observation time. The present result suggested that the poster which evokes the gaze of others affects social nuisances.

Correspondence to : Misa TACHIBANA

Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : misat0825@yahoo.co.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.1, 2018 241 – 247)

